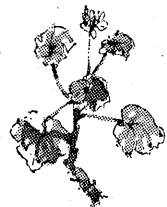


ヨーロッパの旅(十)

平井信義



いよいよパリを飛び立って、マールブルクに行く。マールブルクは、西ドイツの大学都市の中で、私が最も好きな町である。

町の北側には高い丘があり、その上にお城がそびえている。お城の裾に町がひろがっており、ライン川を隔てて、お城と対峙して再び丘となる。ライン川は、二つの丘の間をうねうねと流れているのであった。

思い出は、十六年前にさかのぼる。大学病院精神科の児童部を訪れた日のことである。ケルンから汽車で二時間余り南に下るとこのマールブルクに着く。古い形のコンバートメントの客車にのり、ケルンを立ったのであるが、その古ぼけた列車は、木製の座席であり、駅につくたびに、一つの客車にある六つか七つの入口があけられ、発車間際になると、外から車掌がその扉をばたあんと閉めるその音が、今でも耳の底に残っている。この音は、故郷を離れて郷愁にかられている者にとっては、無惨にも脳

に割り込んでくるような音であった。私は、その音をきいて、幾度か飛び上がる思いがした。

夕方マールブルクについた私は、うねうねと続き、いくつかの坂道をのぼったりおりたりする細いパールフス通りを歩いていく。パールフスというのは裸足という意味であるから、訳せば裸足通りとも呼ぶべきであろう。石畳が敷かれ、馬車が通るとがらがらと大きな音がわき起こる。この通りが、マールブルクのメインストリートであった。

地図を頼りに、先ず、カルシュユさんの家に行く。カルシュユさん夫妻は、日本に二〇年もおられたという方で、私に会うのを楽しみにしているという手紙をいただいていた、日本語も通ずるという気安さが、初めてのこの町での私の足どりを軽くした。二〇分も歩いた頃、番地がカルシュユさんの家のナンバーに近くなり、一軒一軒のナンバーをのぞき込むようにして歩くと、右側の石段を

何段か上がった三階建ての家に、カルシュさんの家のナンバーを見つけた。

ブザーを鳴らす。待っていましたとばかり扉があいて、カルシュさんのまろいこやかな顔。そして、たくさんの白髪をまじえた夫人の顔がカルシュさんの肩から私を見下ろしている。握手、また握手。部屋に入った私は、早速に日本の話について、あれこれときかれる。昭和三十年のことであり、日本もまだ復興というには早い状態にある頃であったが、喰い入るように私の話に耳を傾けたカルシュさんは、「日本はよい国です。もう一度いきたい。だが、年をとってしまった」といって、首を振った。

「日本へいくチャンスがあるでしょう？」とたずねると、

「チャンスがあっても、二人のからだが許さないでしょう」という答えであった。「しかし、日本は再び早く復興する。それが見たい」などもいわれた。二時間ほどでカルシュさんの家を辞し、カルシュさんが予約しておいて下さったパンションにいった。そこで一〇日間を過ごしたのであるが、実はそれきりカルシュさんとはお会いする機会を失ってしまった。マールブルクを去る時に立ち寄ったのであるが、夫妻とも不在であった。その後数年して、風の頼りにきいたところでは、夫妻とも故人になられたということであった。

その翌日の夜、私の部屋に、名も知らぬ男から電話がかかってきたのも忘れられない思い出である。

「あなたは、日本人か?」「然り」「ゴができるか?」「ゴ?」

「そうだ、碁だ」「碁ならできる」「あなたと碁をやりたいが、今晚部屋をたずねてもよいか」「今夜は、時間がある」「それは、八時半にいくが、よいか?」「待っている」

ちょうど約束した時間に、一人の男が私の部屋の戸をノックした。戸をあけてみると、若い男がかしこまったように立っていて、手には、二つ折りにした板と、紙の小箱を二つたずさえていた。

「私はこの大学の、工学部で勉強している学生ですが、数年前から碁を自習しました。日本人と一度試合をしたいと思っていたが、私にあなたのことを知らせてくれる人があったので、失礼とは思ったが楽しみにやってきました」と、彼はいった。この青年を目の前にして、私は実に妙な気持になったのをおぼえている。

異国における全く突然のできごとであった。碁を打つのは、うれしような気がする。しかし、取り立ててうれしいとも思えない。すでに囲碁から離れて数年になり、余り自信はないが、いったい彼がどのくらいの力があるのだろうか、それもわからない。

しかし、その青年は遠慮なく私の前に板を差し出した。自分で

黒い線を引いたのであろう、ところどころゆがみを持った線が、碁盤の目を作っていた。二つの箱のふたがあげられて、みると、碁石はすべて白と黒のボタンであった。「いいアイディアだ」と私が言うと、彼はうれしそうに微笑した。そして、私に、白を持つてという。承諾した。

しかし、打ち始めてみると、初めは優勢であった私の碁も、最後のはげしい攻撃に合つて、右の隅が大きく死に、第一回戦は惨敗に終わった。その時のうれしそうな青年の顔は、今でも忘れられない。二番碁となり、私が黒をもった。しかし、これも私の敗北に終わってしまった。すでに十一時を過ぎていたので、二番でやめることにしたが、彼はまことに意気揚々として私の部屋を出ていった。「日本人に勝つた！」という誇りは、非常に高かったと思う。それきり彼からは連絡がなかったが、そして、その後十五年。彼のことは忘れがちであったが、こうしてマールブルクの地を踏んでみると、思い出されることである。名前も忘れてしまった。しかし、どこかでテクニシャンとして活躍しているであろう。碁の腕前はその後どのようなようになっているであろうか。あのようすでは、恐らく腕前をあげていることであろう。

マールブルクは、今回で三回目になる。前回は、家内と同伴で

あった。ぜひこの町のお城や町並を家内にも楽しんでもらいたかった。僅か三日の滞在であったが、お城にのぼり、町を見おろし、あるいはラーン川のほとりを散策したりした。とくに、裸足通りに面して十二世紀の建物が建ち並び、中央の市場と呼ばれるわずかばかりの広場には、朝市が立ち、早くから買物客に呼びかける大きな声が響いたりした。

そこには、市役所があったが、「太陽」という酒場の方が、私には親しみがあつた。入口の戸口の上に、金具で作られ金色をした太陽の看板がさげてあり、その太陽には笑顔が刻まれていた。それが何を意味するかよく知らなかったが、やはり十二、三世紀頃の建物で、二階にあがると、その床はきしんだりした。このワインは、ムードも手伝つてか、あるいはつい高い値段のものを奮発するためか、殊更に美味であつた。酔うほどに楽しくなる酒場であつた。

今度も、二度ほどこの酒場を訪れた。一回は、夕飯後に、ここに留学しているHさんとその男友だちのドイツ人学生と、ベルギーからかけつけてくれたYさん、それに私とともにヨーロッパの旅を続けているI氏との五人であつた。ドイツ人学生は神学の専攻ということであつたが、彫りの深い顔にふさふさと生やした口ひげとあごひげとは、その重々しい話し振りと相まって、なかな

かの威厳を備えていた。先ず、私が二〇マルクをこえるライン酒を注文する。ドイツの葡萄酒には、ライン酒とモーゼル酒の二つの系統があり、それは好みによるが、私にはライン酒が合う。いずれにしても、一本が二千円に該当するからよい酒にちがいない。

小さな木の桶に水を入れ、その中にワインのビンがつけてある。ボーイがそれを取り上げ、白い布で水を拭き取ると、おもむろに栓抜きでコルクの栓を引き抜くのである。ボンという音とともに栓が抜けると、ちょっとやうやくしく、私のグラスに少量のワインを注ぐ。私は、グラスを取り上げて、そのワインを舌の上でころがし、味をためす。「これはうまい」とか、「すばらしい！」などともったいぶって言うと、私の顔をのぞき込むようにしていたボーイが、うなづくようにしてから、各人のグラスへなみなみとワインを注いでまわるのである。

そこで、いっせいにグラスを取り上げる。そして、右の人に左の人に前の人にといいた具合に、おのおのが目と目と合わせ、「プロースト！」という。乾盃という意味である。そして、一口飲むと、再びそれぞれの人々が目と目とを合わせて、グラスを机の上におく。目と目とを合わせる——これは、まさにドイツふうというべきであろう。そのような時、目を細めるドイツ人もあるが、にらむように見詰めるドイツ人もある。グラスをともに口

にするたびに、目と目とを合わせる人もいるが、自分勝手にグラスにワインを注いでは、飲み乾していく人もある。あとは、その人々の好みに従えばよい。

そのワイン酒も実においしかった。酔いがまわるにつれて、話題がはずみ、笑いが次々と起こる。ふと気がつくとき、私どものまわりのテーブルは、ドイツ人でいっぱいになっていた。多くが、夫婦揃ってきている。太った亭主にやせた妻君もいる。年をとった夫婦もいれば、若い夫婦もいる。子どもを八時までにねかせつけてから、このように夫婦でもって酒場に飲みに行くのが、彼らの習慣になっている。子どもたちから解放され、アルコールもまわってくる、すっかり陽気になる。嬌声がさかんにあがる。何組かの夫婦で来ているテーブルでは、お互いに肩と肩を組み合せてからだをゆすりながら民謡を合唱している。ますます賑やかになると、私どもの笑い声などはかき消されてしまうほどであった。

わが国では、夫婦で飲みに行くなどの機会はまことに少なからう。妻君の方には、酔う楽しみを知らない人が多い。酔うことは、不真面目な行爲と思われている。二人で酒場に行っても、亭主だけがぼそぼそと飲むことになってしまふであろう。それではつまらないから、結局は、亭主一人で来る酒場になってしまふ。そこには、女の給仕がいて、その人を相手に飲むということにな

る。キャバレーにしても、同じ仕組みになっている。このドイツには、給仕といえはそのほとんどが男性である。飲んでいる客の相手をする女性には不要に近い。いても、酒や料理を運ぶだけのサービスである。とにかく、彼らは夫婦で楽しむ習慣が確立しているのである。全く、子どもの姿はそこにはない。

その間に、子どもたちはどうしているのであろうか？ すでに熟睡したからだをベットの横たえている子どももあろうが、寝そびれて、青い目をあけたり閉じたりしている子どももある。パパとママとはどこへいったのだろうか——と不安に思っている子どももある。あるいは起き出して、玩具箱から玩具を引っ張り出して、それらが睡眠障害の原因になっているという。

石の家に住んでいるから、火災の心配は少ない。地震もない。その点でも、親たちは安心して子ども一人を家において出かけることになっているのである。わが国のように、火災が多く、地震の心配のある国では、どうしても夫婦のうちのいずれかが子どものそばにいななければならないから、家をあけることができない。当然、母親が家に残るといことになる。幼い子どもを家に残して夫婦ででかけるなどは、耐震耐火の建物ができた日のことであろう。私は、酔いがまわるほどに、周囲のドイツ人が賑やかに飲

んだり歌ったりしているのを眺めながら、そのようなことを思ったりした。

われわれのテーブルの最初のビンが空になると、神学生が同じ種類のワインを注文した。彼がおごつてくれるというのである。同じようにしてワインのビンが運ばれる。再び「ブロースト！」目と目を合わせる。一と口飲み、また目と目を合わせる。

恐らく、私の頬は赤くなり、目は少しばかりとろんとしてきていたかも知れない。くつろいだ気持になると、旅の疲れがにじみ出てくる。このままここへ寝込んでしまいたいような気分になり。まだ、ヨーロッパの旅は、半分になっていない。スイスへ、イタリーへ、そして、最大の目標であるオーストラリアへ——まだまだ旅は長い。

私は、この前の時にも、旅の半ば頃になると、日本に帰りたくなる。カレンダーの日付けを消して、帰りつくまでの日を数えるようになる。そのあげく、どうしてヨーロッパなどに来てしまったのだろうか——などと思ったりもする。帰国すれば、すぐに、旅に出たくなるはずなのに——。いわば、郷愁であった。郷愁は、酔いがまわるほどに強くなる。周囲に三人の日本人がいて、気安いふんい気があるにもかかわらず、私の郷愁は強くなっていた。

十一時を過ぎた頃、ぶらぶらと裸足通りを戻りながら、ホテル

に着くと、早速部屋の鍵を受け取り、まっすぐに自分の部屋へとたどり着いた。通りとは反対の、裏山に面したその部屋は、森閑としていた。まだ九月の半ばだというのに、何か寒々とした感じさえした。そのような時、私は、カバンの中から家族の写真を取り出す。そして、机の上にそれを立てるのであった。それをじつとみていると、家族の誰かが、私に向かって笑いかけてくれるような感じがする。それを見ながら、洋服からゆかたに着替え、「おやすみ」といい、明りを消し、ベッドの中にもぐり込む。そこには、明朝までの熟睡が待っているのである。

いよいよ明日は、大学の精神科を訪れる。しかし、マールブルクを訪問した目的の一つであるウェーバーさんがいなかったのは、私を落胆させた。ウェーバーさんは、女医さんである。十六年前にこの地に来た時もフロイライン(未婚の女性)であったが、今日もなお、フロイラインであった。目下、講師資格を取得する論文を書くために、スイスの山の中に引き籠っているという。

十六年前にここへ来て、はからずもウェーバーさんに会うことができたことは、いくつかの面で開眼する機会となった。すばらしい人間であると思う。次の回には、ウェーバーさんの出会いに ついて話しをしよう。

寒 風

風が野を貫いてゆく。どこまでつめたい風なのであろうか。そのゆく所、触るる所、もの皆荒み破られぬはない。つれなやただ一ひら残る梢の枯葉をだに吹き払い振り落さではやまぬという。哀れや落された枯葉の群がまたもやかさかさど吹きまわられてゆく。どこまできびしい追究の風なのであろう。

省みればわが心にもこの寒風はあるまいか。わがゆく所、触るる所、一陣荒涼のつめたさを現じ、苛酷のつれなさを撞にするようのはあるまいか。その目、その唇、風の様に人を貫き、裂き、責め、傷つけることはあるまいか。

風に荒された野は、また来ん春の回復もある。一たび心の寒風に荒んだ心は、また回復のよすがもない。

願わくは寒風をしてひとり野を吹かしめよ。わけても柔かき子供の前に、わが怖しき寒風をして荒まざらしめよ。

倉橋惣三選集第二巻 幼稚園雑草より